

「吾が事」と「吾が事に非」ざること

上うえ廣ひろ榮えい治じ

原油価格の暴騰と中国製餃子中毒事件のニュースで始まった今年は、マスコミが大騒ぎする事件の多い年でした。ガソリン価格の高騰は毎日のように報じられましたし、食品に農薬や殺虫剤やシアンなどが混入していたことで、何度も回収騒ぎがありました。中国産が敬遠されて産地偽装も続出し、そのつど、ワイドショーで取り上げられました。

北京オリンピックの聖火リレーの期間中は、聖火の行く先々から、チベット問題への抗議行動が大々的に報じられました。首相の突然の辞任や自民党の総裁選挙も、連日、マスコミを賑にぎわせました。

アメリカ大統領選挙の民主党の候補者選びも大騒ぎでした。初の女性大統領を目指すヒラリー候補と人種の壁に挑戦するオバマ候補の動向が、いちいち茶の間に伝えられ、それが決着すると、今度はオバマ候補対マケイン候補の闘いに焦点が移り、オバマ大統領の誕生で、また盛り上がりました。

昨年に引き続いて取り上げられてきたアメリカのサブプライムローン騒動は、九月のリーマンショックをきっかけに、世界規模の金融危機と株の大暴落、それに円の急騰と、矢継ぎ早に激震が襲い、世界は大きく

揺れました。ニュース解説者も評論家も、百年に一度の危機だ、世界経済の底が割れるなどと危機感を煽あおりました。

しかし、そのいずれの事件も、多分に空騒ぎにすぎるように思えるのです。たしかに当事者にとっては、大変なことであったでしょう。被害にあわれた方々には同情を禁じえません。しかし、大多数の人々にとっては、大騒ぎするほどの影響はなかったのではないのでしょうか。

例えば、ガソリン価格です。一時はリッター一八〇円台にまで跳ね上がりました。それでも、仕事その他で車が必須な人でなければ、車の使用を控えることで、なんとかしのげる範囲です。

しかし、ガソリンスタンドの価格競争の激化が伝えられると、一円の違いで、行列ができるスタンドと閑かん古鳥こどりが鳴くスタンドに分かれました。わずかに、二円でも、安さを求めて、わざわざ遠くの町からやってくる人も少なくなかったといえます。高価なガソリンを使つてです。これはもう過剰反応、空騒ぎというほかはありません。

まして、他国の大統領に誰がなろうと、私たちの日々の暮らしに及ぼす影響は、ガソリンのリッター単価ほどにも大きくないに違いありません。

株の暴落や円の急騰は金融機関や輸出に頼る大企業、あるいは大口の投資家などには、たしかに大きなダメージでしょう。しかし、大多数の人々への影響は、少なくともある段階までは、マスコミが大騒ぎするほどのことはなかったはずでです。

新聞であれテレビであれ、騒動あつてこそその商売ですから、事あれば大げさに騒ぎ立てるのは、いたしたくないのかもしれませんが。しかし問題は、そうしたセンサーショナルな報道や危機を煽る論調によって、実はほとんど関係のない人々の心情までがかき乱され、不安や焦燥を増大させて、過剰な言動を誘発し、事態

を悪化させることなのです。火に油を注いでしまうことなのです。

もしも、各国の政府やマスコミが混乱を收拾させるべくつとめ、人々もまた平静に事態を受け止めたとしたら、これほど激しい通貨の変動も株価の暴落もなかったでしょう。また、投機家たちがいくら仕掛けても、大多数の人々がマネーゲームに踊らされることなく賢く冷静であったなら、そもそも今回の危機など起こらなかつたに違いありません。

これまでにも、戦後の混乱をはじめ、オイルショックやバブルの崩壊などの大騒ぎがありました。たしかに困難な時代ではありましたが、後から振り返ってみれば、別段、命にかかわるほどのことではありませんでした。

楽観論を申し上げるつもりはありません。ただ、今を生きる私たちには、未来は予測できないということなのです。まして、社会や経済が国際化し、複雑さを増している現代にあつてはなおさらです。今、危機的な未来を声高に予測している専門家たちにしても、一年前には誰一人、その後の金融危機や株の大暴落を予測できなかつたではありませんか。

とすれば、いちいちの報道の大騒ぎに振り回されて、一喜一憂し、心配したり、不安に苛さいなまれたりするものは、心の無駄であり、時の無駄というものです。

忘れてはならないことは、私たちは、「我も人ももの仕合わせ」だけを目指して、ただひたすら今日一日を生きる実践者であるということです。目前の事件が、明日に、また来年に、どのような影響を及ぼすにしても、及ぼさないにしても、今日一日の実践に何のかわりもないことなのです。

倫理の実践一筋に生きる人は、世の混乱に動ずることがありません。何事にも思い悩むこともありませんから、いつも心は穏やかです。

「百人一首」の撰者として知られる藤原定家は、源平の争乱に明け暮れた平安時代の末から鎌倉時代の初めを生きた人ですが、その日記に「紅旗征戎 吾が事に非ず」（『明月記』）という有名な記述があります。「紅旗」は朝廷、「征戎」は反乱分子を征伐すること、「朝廷の人事も東国征伐も、私の問題ではない」という意味です。つまり、一身の出世にも、世間の混乱にも惑わされることなく生きるのだ、という決意を示したものです。そして彼の「吾が事」とは、もちろん歌の道です。

私はこの言葉を学生時代に先師から教えられました。もちろん私たちにとつての「吾が事」とは、倫理の実践です。お蔭で私は、青年期特有の懊悩おうれうにも、戦後社会の混乱にも心乱されることなく、今日一日の実践に邁進することができました。

来年もまた、今年同様、事の多い年になるでしょう。それが巡り巡ってどこにどのような結果するのかは、私にはわかりません。予想しようとも思いません。しかし、どのようなことであれ、結局は大自然の摂理のままに、然るべき時、然るべきところに、然るべき結果をもたらすでしょう。

世の中は「なるようにしかならない」と申します。ということは、善かれ悪しかれ、いずれは「なるようにはなる」ということです。「なるようにしかならない」ことに振り回され、思い悩む暇があったら、今できること、我にも人にも、確実に、より善い結果をもたらす「吾が事」に全力を注ぐのが、私たちの正しい生き方であると思うのです。

